

ルクセンブルク語クレルヴォー方言の特徴 —文章語としての使用例の分析—

田村 建一

日本語教育講座

The Features of the Clervaux Dialects of Luxembourgish —Analysis of Written Texts—

Kenichi TAMURA

*Department of Teaching Japanese as a Foreign Language,
Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

1. はじめに

ルクセンブルク語はルクセンブルクの唯一の国語であり、またフランス語、ドイツ語と並ぶ公用語のひとつでもある。この言語は、系統の上では中部ドイツ語のモーゼル・フランケン方言に由来し、ドイツの隣接する地域の諸方言と共通の特徴をもつが、国民意識の形成にともない19世紀半ばから行われてきた文章語化のプロセスを経て、独立した言語として確立し、標準化が進行しつつある拡充言語 (Ausbausprache) である。¹

ルクセンブルクは日本の神奈川県とほぼ同じ面積をもつ小さな国ではあるが、ルクセンブルク語にはいくつかの地域変種 (以下、方言と記す) が認められており、方言間の微妙な違いが話者の間ではよく意識されている。² Gilles (1999)³によれば、これらの方言は大きく四つのグループに分類される。話される地域とともにそれを示せば、以下のとおりである。

中部方言：首都ルクセンブルク市とその北に広がる地域。北はディーキルヒ周辺まで、またレダンジュ等の西部地域も含む。

南部方言：エッシュ・シュル・アルゼットなどフランスとの国境沿いの地域。

東部方言：フィアンデン、エヒテルナハ、レーミヒ等、国の東部を南北に走る地域。

北部方言：ヴィルツやクレルヴォー等の北部地域。

この中で標準語の基になったのは中部方言である。

近年、ルクセンブルク語で書かれた文学作品が毎年数多く刊行されており、⁴また2008年からルクセンブルク語の日刊紙がメールで配信されるなど、文章語に関しては標準ルクセンブルク語の存在がますます顕在化している一方で、話し言葉においてはいまだに方言がよく用いられており、特に北部方言と東部方言の地域に方言使用者が多いとみなされている。⁵また、標準ルクセンブルク語による会話であっても、発音の特徴から話し相手の出身地域を推測できると指摘する人も多い。

本稿では、田村 (2014) に引き続き、ルクセンブルク語北部方言が文章語として用いら

れる例を紹介する。今回は、ルクセンブルクで最も北に位置するクレルヴォー地区（クレルヴォー・カントン⁶）の方言に焦点を当て、その言語的特徴を探るとともに、方言の使用状況や方言が文章語でも用いられる背景についても考察する。

2. クレルヴォー地区の方言話者へのインタビューから

2.1 インタビューで得られた情報

筆者は2013年9月にルクセンブルク最北端の鉄道駅のある町トロワヴィエルジュで、クレルヴォー地区に住むか、あるいはこの地区の出身である6名の人たちと会見することができた。⁷ 全員が一堂に会してのインタビューであったため、各人の言語生活を詳細に訊くことはできなかったが、その後のメールによる私信から得られた情報も含めて、この地区の方言使用に関する興味深い事実をいくつか知ることができた。ここでは4人から得られた情報を紹介する。インフォーマントはC-1、C-2等の記号で表す。

上述のようにルクセンブルク語は、大陸の西ゲルマン語連続体の中でモーゼル・フランケン方言の中の西端の一角を占めるが、北部方言が話される地域は、ケルンを中心とする中部ドイツ語リプアリア方言域と接しており、そのため北部方言にはリプアリア方言と共通する特徴がいくつか見られる。こうした方言の連続性を示す事例がインフォーマントのC-1氏（男性、70歳代、元リセ教員⁸、クレルヴォー市のすぐ北西に位置するエーゼルボルン出身）から得られた。C-1氏は若い頃に、隣接するドイツの地域の若者たちとの交流会に参加したことがあるが、ルクセンブルクとドイツの若者の双方がそれぞれの方言を話して、それで充分に通じ合えたということである。C-1氏によると、現在の若い人たちの方言は、ルクセンブルク、ドイツともに標準語に近づいているため、もはや方言で通じ合えることはないであろうとのことである。

これと類似の事例であるが、トロワヴィエルジュで保険や経理の代行業務を行う会社を営んでいるC-2氏（女性、50歳代、トロワヴィエルジュ出身）は、ベルギー東部のドイツ語圏にも多くの顧客を抱えているが、ザンクト・フィートなどルクセンブルクとの国境沿いに住むベルギー人ドイツ語話者の顧客との会話では、お互いが自分の方言を使うということである。これに対し、北部方言以外のルクセンブルク語を話す顧客との会話では、北部方言を使うと相手が理解できないか、あるいは理解できないふりをされるので、標準ルクセンブルク語を用いるとのことである。

C-2氏は、こうした業務での会話も含めて一般にルクセンブルク語を用いる場合、相手が自分と同じ方言を話すかどうかによって方言と標準語を使い分けている。これに対し、彼女の夫であるC-3氏（男性、60歳代、トロワヴィエルジュ出身、すでに退職）は、相手が自分と同じ方言を話す場合であれ標準語を話す場合であれ、常に方言を使用するとのことである。

次に日常的な文章語での方言使用に関してであるが、このC-2氏とC-3氏の夫妻は、これまでメールやSMS等においてルクセンブルク語を使用することはなく、フランス語かドイツ語を使用してきた。しかし、彼らの娘さん（30歳前後、リセ教員）に促されて、（調査時点の）2年前から家族間等、親しい人たちとの間ではルクセンブルク語を使うようになっ

たとのことである。なお、娘さんはトロワヴィエルジュの育ちではあるが、今ではルクセンブルク語を使う場合には標準語の方を使っており、自分が方言を使うことに対しては違和感をもつとのことである。この影響もあってか、C-2氏が娘さんとの間のメールやSMSで用いるルクセンブルク語は、方言の場合もあれば標準ルクセンブルク語の場合もあるとのことである。

C-2氏によれば、最近までメールやSMSでルクセンブルク語を使用しなかったのは、「学校教育も含めて、これまでルクセンブルク語の書き方を習ったことがない」からであり、「正しく綴っているかどうか今でも自信がもてない」とのことである。

C-4氏(女性、30歳前後、トロワヴィエルジュの東、ドイツとの国境沿いにあるリエラー [Lieler] 出身、小学校教員)は、日常生活では方言を使用することが多く、メールやSMSにおいても、それらを利用し始めたリセの生徒の時からすでに方言を使用しており、また勤務先の学校においても、児童の保護者に宛てた連絡文書や学校のホームページに掲載する行事等の報告文書では、北部方言を使用することが多いとのことである。そうした文書の実例は第4章で示す。現在、ルクセンブルクのどの地域においても外国人の住民が多いことから、方言で書かれた文書を外国人の保護者が理解できるのかどうか訊ねたところ、外国人の住民も日常生活でルクセンブルク語の現地方言になじんでいるので、理解には支障がなく、むしろ方言で書かれた文書の方が標準語よりも親しみを感じてもらえるのではないかとのことであった。

また、C-4氏は学校で児童にも同僚にも基本的に方言で話しかけているが、外国人の保護者と話す時には、相手がポルトガル人であればフランス語を、旧ユーゴスラビア出身者であればドイツ語を使うとのことである。⁹

C-4氏は、リセ修了後、ルクセンブルク市近郊のヴァルフェルダンジュにある教育大学に通っていたが、大学内では周りの教員や学生が自分の方言を理解しないので、標準ルクセンブルク語を使用したとのことである。

また、C-4氏の夫はベルギーのドイツ語圏出身であるが、すでに長くルクセンブルクに住んでおり、現在ルクセンブルクの国家公務員に就いているため、標準ルクセンブルク語が話せ、また読み書きもできる。夫婦間の会話では、夫が標準ルクセンブルク語を用いるのに対し、C-4氏は常に北部方言を用いるとのことである。

2.2 調査結果の考察

以上の情報を整理し、筆者が翌2014年8月～9月にヴィルツ市で行ったヴィルツ方言話者に対する聞き取り調査の結果も参考にして考察を加えてみる。なお、ヴィルツでの調査の詳細については稿を改めて報告する。

クレルヴォー方言話者の中には、C-3氏のように相手が誰であれ常に方言を使用する人もいれば、C-2氏のように相手に応じて方言と標準語を使い分ける人もいる。またC-4氏のように若い女性で、しかも小学校教員という知的な職業に就いている人でも方言の方を多く用いる人がいる。その一方で、C-3・C-2夫妻の娘さんのように、すでに方言を使わなくなった人もいる。ヴィルツでも、20歳代の方言話者と何人か会うことができたが、彼女たち・彼らは親しい者同士で、また職場においても、会話でもメール等のやり取りにおいて

も方言を使うことが多いという。ただし、周りの同世代の人たちの中には、リセに入学した後には方言を話さなくなった人もけっこういるとのことである。

ヴィルツで育ったある年長のインフォーマント(男性、50歳代、小学校教員)によれば、彼が子どもの頃に周囲で話されていたのはほとんど方言ばかりで、標準ルクセンブルク語を聞く機会は非常に少なかったとのことである。当時ヴィルツにリセがなかったため、彼はエヒテルナハのリセに入学し寮生活を送ったが、一緒にヴィルツから同じリセに入学した同級生がすべて話し言葉を方言から標準語に換えたのに対し、彼だけが学校でも方言を使い続けた。その方言使用のせいで同級生や教師から疎んじられるように感じたものの、彼にとっては家族と同じ話し方をすることの方が大事だったということである。このようにクレルヴォーにおいてもヴィルツにおいても、子どもの時から一貫して方言を使用し続ける人がいる一方で、他地域出身の人たちと出会う機会が増すリセ入学などをきっかけに、方言を使用しなくなる人々も存在するようである。

文章語における方言の使用に関しては、上記C4氏が職場の小学校で作成する文書に方言を使用するということであるが、同様にヴィルツのある20歳代の女性インフォーマント(幼稚園教師)によれば、勤務先の幼稚園で保護者宛ての連絡文書にフランス語、ドイツ語と並びルクセンブルク語も使用するが、他の教員が標準ルクセンブルク語を使うのに対して、彼女は方言も使うということである。また、彼女は地域の合唱団や音楽クラブの活動にも参加しているが、そこで作成する文書でも方言を使うことがあるとのことである。

上記C-2・C-3夫妻の世代は、学校でルクセンブルク語の書き方を習うことはなく、比較的最近になってやっとメール等でルクセンブルク語を使うようになった。これに対し、同じ世代に属す上述のヴィルツの50歳代男性は、すでに若い時から家族との手紙では方言を使用していたとのことであり、上記のクラブ活動での方言使用も含め、人によっては以前から方言を文章語として使用していたと考えられる。

このヴィルツの男性は、方言の綴り方に関しては、父親から「規則はないのだから、話す通りに書くように」とアドバイスされたそうである。ヴィルツの20代男性のインフォーマントも「誰も方言の綴り方を習ったことがないので、人によって異なる綴り方が見られる」と指摘している。次章で引用するクレルヴォーの若者たちの方言による文章においても、同じ語に対していくつかの綴り方が現れる。標準語の正書法に依拠しながらも、標準語との相違の表し方には個人差が現れるのは当然のことと言えよう。

3. 地域の雑誌に見られるクレルヴォー方言

3.1 季刊誌 „De Cliärrwer Kanton“

トロワヴィエルジュでのインタビュー調査のさいに、C-2とC-3の夫妻から北部方言が文章語として使用されている例として、„De Cliärrwer Kanton“という雑誌の存在を教示された。これはDe Cliärrwer Kantonという文化団体が1979年から刊行している季刊誌であり、クレルヴォー地区の自然や生活も含めた広い意味での地域文化を扱っている雑誌である。使用される言語は、ドイツ語による記事が主体ではあるが、たまにルクセンブルク語北部方言による記事も掲載される。

この雑誌の2007年特別号には、クレルヴォー地区出身の若者たちに対する、学校時代の思い出やその後の進路や職業選択、そしてクレルヴォー地区に住むことの便利さや不都合な点に関するアンケート調査の回答が掲載されているが、回答者の大半の者が多かれ少なかれ方言を使用している。ある回答者(C-4氏の職場の同僚)によれば、この調査はメールを介して行われ、寄せられた回答はほぼそのままの形で印刷されたということである。それは、綴り方に統一性が見られないことにも表れている。この記事には若者がふだんメールで使用するルクセンブルク語がよく反映されていると考えられる。

編集者によってこの記事が企画された背景は以下のとおりである。¹⁰ 北部方言が話される地域は、もともとルクセンブルクの中で人口密度が低い地帯であるが、クレルヴォー地区では第二次大戦後、人口の減少が続き、1981年には最小値を記録した。¹¹ そうした現象を受けて、地区の将来に不安を感じた有志たちの企画により1991年に „De Cliärrwer Kanton, E schéint Stéck Lëtzebuerg“ (クレルヴォー・カントン、ルクセンブルクの美しい一角) という展覧会が開催された。この展覧会では、第二次世界大戦中のアルデンヌの戦いをはじめとする歴史や、自然、芸術、産業の他に、未来に向けての批判的な問いかけもテーマにされた。その中で、当時幼稚園と小学校に通っていた子どもたち約1300人の写真が展示され、「この中の何人が10年後、15年後にまだクレルヴォー地区の住民であろうか」という問いが立てられた。

2007年の若者に対する調査は、この展覧会での問いに答える形で実施されたものである。回答者たちは1991年の時点で幼稚園児または小学生(すなわち5~12歳)であったので、アンケート調査の時点では21歳から28歳であったと思われる。回答を掲載している、Interviewsと題するこの記事の解説(96頁)によると、約50人に(上述のようにメールによって)質問がなされ、その多くが回答を寄せ、また編集者の依頼に応じて顔写真も提供した。

次節で分析するのは、97~121頁および129~132頁に掲載された45名(男性26名、女性19名)の回答である。¹² なお、96頁に掲載されている質問文は標準ルクセンブルク語で書かれている。質問の内容は、氏名、子どもの頃と現在の居住地、学校時代の思い出(建物、交通手段、同級生、先生たち)、クレルヴォー地区に住む上でのいい点と悪い点、現在の職業(教育機関、選択の理由など)、職業に就く上でクレルヴォー地区に住むことが不利になったか、将来もクレルヴォー地区に住みたいかどうか、などである。どの回答文も書かれた内容の順序が同じことから、アンケート形式の各質問への回答が、質問文を削除する形で掲載されたものと思われる。

なお、標準語でのアンケート質問文に多数の人が方言で回答した理由については、本稿の第5章で考察する。

3.2 雑誌記事に見られるクレルヴォー方言の特徴

本節では „De Cliärrwer Kanton“ 2007/Edition Spécialeに掲載された若者の回答文に基づいて、クレルヴォー地区の方言の特徴を分析する。もちろん回答を寄せた若者たちのすべてが方言を使用しているわけではなく、また方言を使用している人たちの間でも方言使用の程度にはかなりの相違が見られる。さらに、回答者たちはクレルヴォー地区のさまざまな

自治体の出身者であって、それぞれ微妙に異なる方言体系を使用していると思われる。したがって、ここで行うのは、あくまでもクレルヴォー地区全体としてどのような特徴がどの程度使用されているのかという観点からの分析であって、田村（2014）で分析したヴィルツ方言のような一つのまとまった方言体系が対象ではないことに留意すべきである。ただし、本稿ではクレルヴォー地区の諸方言全体を一括してクレルヴォー方言と呼ぶ。

若者の回答文の中に使用されている方言の特徴として、下記（1）～（10）の10項目を挙げてみる。これらの項目の内いくつを使用しているかという点に基づき、回答者45人を三つのグループに分類すると、次のようになる。

- a 標準ルクセンブルク語だけで回答した人： 7人（約16%）
- b 1つか2つの項目を除き標準ルクセンブルク語で回答した人：12人（約27%）
- c 方言的特徴を三項目以上使用した人： 26人（約58%）¹³

このうちaとbのグループが基本的に標準ルクセンブルク語で回答した人たちと見なせるが、bのように一部だけ方言を使った人たちの間でどの項目が多く使用されているかを見ると、12人中7人が下記の（1）に当たる *sënn* (L *sinn*, D *sind*) を使用し、また5人が下記の（3）に当たる形容詞・副詞語尾の *-lich, -ig* (L *-lech, -eg*) を使用している。以下、語例等の引用にさいしては、参考としてドイツ語形も挙げ、また次の略号を用いる。C = クレルヴォー方言、D = 標準ドイツ語、L = 標準ルクセンブルク語。

これに対しcのグループは方言をよく使用している人たちと見なせるが、回答者全体の半数以上を占める。このことから、クレルヴォー地区の若者は、メールやSMSなど話し言葉に近い電子メディアにおいては、方言をかなり多く使用すると考えられる。伝統的な方言が高年齢層にのみ用いられ、若年層に受け継がれないという現象が世界各地で見られるなか、クレルヴォー方言はまだ着実に若年層にも継承されているといえる。

以下、方言の特徴を示す10項目を、cのグループに該当する26人の中で多くの人に使用された項目から順に示す。項目ごとの使用者数の後に記すパーセンテージは、この26人中の比率を表す（小数点以下四捨五入）。

- (1) C *sënn*¹⁴ (L *sinn*, D *sein*) 「～である」(ただし、ルクセンブルク語は標準語、方言ともに現在1人称単数形および1・3人称複数形でもある)：24人（92%）
※この内1人が標準形と方言形を併用している。
- (2) C *han/hann*¹⁵ (L *hunn*, D *haben*) 「持っている」：24人（92%）
※数名の *hon/honn* の使用者も含む。24人中5人が標準形と方言形を併用している。これと同じ音対応を示す前置詞 *van* (L *vun*, D *von*) 「～の」の使用者も17人いる。
- (3) アクセントのない音節における母音 *i* の保持（標準語の形容詞語尾 *-lech, -eg* などに対する *-lich, -ig* など）：23人（88%）
※例としてはC *méiglich/miglich* (L *méiglech*, D *möglich*) 「可能な」やC *Aarbicht* (L *Aarbecht*, D *Arbeit*) 「仕事」などが挙げられる。3人が標準形と方言形を併用している。また、標準形の *ech* 「私」に対する方言形 *ich* の使用者が10人いるが、その内6人は標準形と方言形を併用している。この項目はヴィルツ方言にも見られる特徴である。

- (4) C waanen (L wunnen, D wohnen) 「住む」、C Naam (L Numm, D Name) 「名前」: 22人 (85%)
 ※これは標準語の [u] に対して方言形の [a:] が対応する例であるが、この2つの語は、ほとんどの人が名前と居住地に関する回答に用いている。ここでは2つの語のうち1つ以上で方言形を用いた人をカウントする。なお、「住む」においては、2人が標準形と方言形を併用している。また、woonen 「住む」の使用者1名もここに含める。
- (5) 破裂音 t/d の前における長母音または二重母音の軟口蓋音化: 21人 (81%)
 ※多く見られた例は、C hockt/hokt (L haut, D heute) 「今日」、C Legt/Lekt/Lékt (L Leit, D Leute) 「人々」である。3人に次のような標準形との併用が見られる: C Zékt/L Zäit 「時間」、C su wegt/L sou wäit 「それほど」、C Lékt/L Leit 「人々」。¹⁶ この項目はヴィルツ方言にも見られる特徴であるが、軟口蓋音化が生じるかどうかは、北部方言域の中でも歴史的にどのような長母音または二重母音に遡るかによって地域差が見られる。詳しくは Tamura (2011) を参照。
- (6) 語中における s の硬口蓋音化 ([s] > [ʃ]) の不生起: 21人 (81%)
 ※L Schoulmeeschter 「男性教師」(語構成としては D Schulmeister に相当) や L Angscht 「不安」のように、標準ルクセンブルク語の多くの語において語中の [s] が t の前で硬口蓋音 [ʃ] に変化したが、北部方言ではそれが起こらなかった。したがって、これらの語はクレルヴォー方言では、Schullmeester/Schoulmeester や Angst などの形で現れる。3人に次のような標準形と方言形との併用が見られる: C meistens 「たいてい」/L Schoulmeeschtere 「先生たち」。
- (7) C goud (L gudd, D gut) 「良い」、C Berouf (L Beruff, D Beruf) 「職業」: 20人 (77%)
 ※これは標準語の [u] に対して方言形の [ou] が対応する例である。多くの人が回答に用いているこの2つの語のうち1つ以上で方言形を用いた人をカウントする。9人がどちらか1つの語で標準形を用いている。
- (8) 標準語の下降型二重母音に対する上昇型二重母音の使用: 15人 (58%)
 ※例として C Liäwwen [lⁱavən] (L Liewen [li^evən], D Leben) 「生活」、C Muaren [m^uarən] (L Mueren [mu^rən], D Morgen) 「朝」などが挙げられる。本稿では -iä-, -ua- の綴りが上昇型二重母音を表すと考える。Cliärrwer 等の地名やその形容詞形は、標準語を用いる回答者にも見られるので、使用例の対象から除外する。この上昇型二重母音は北部方言の中ではクレルヴォー方言にのみ見られ、ヴィルツ方言には見られない。
- (9) 標準形 net 「～でない」以外の否定辞: 8人 (31%)
 ※具体的には、nek 4人、nik 2人、nit 2人である。このうち nik はヴィルツ方言にも見られる語形である。
- (10) 所有形容詞および不定冠詞類の中性主格・対格形における語尾 -t の使用: 6人 (23%)
 ※例として C mengt Léierpersonal 「私の先生たち」(L mäi¹⁷ Léierpersonal, D mein Lehrpersonal) や C engt Haus (L en Haus, D ein Haus) 「一軒の家」などが挙げられる。

この他に次のような方言形が何人かに見られる：C ischt (L éischt, D erst) 「最初の」、C Schull (L Schoul, D Schule) 「学校」、gruss/gruuss (L grouss, D groß) 「大きい」、C durich (L duerch, D durch) 「～を通して」。また、1名だけではあるが、北部方言の中でも最北端の地域にしか現れないとされる語頭子音の [g] > [j] の音変化を被った語 jiff (L giff) が使用されている。¹⁸ この語は、迂言的接続法のために使われる助動詞の1人称単数形であり、ドイツ語の würde に相当する。

なお、上記の10項目のうち8項目以上の方言形を回答に使用している人たちを、特に方言使用が顕著な人たちとして区別すると、8人がそれに該当し、¹⁹ その内訳は女性が6人、男性が2人である。回答者全体(45人)では男性(26人)の方が多いことを考えると、若い世代においては女性の方が方言使用に積極的である可能性がある。

次節では、これらの特徴を多く含む具体的な回答文を引用し解説する。

3.3 回答文の例

以下に引用するのは、„De Cliärrwer Kanton“ (2007/Edition Spéciale) 97頁に掲載された Valerie Arend 氏(女性)の回答文の一部である。方言形には下線を付す。訳の後に方言形の解説を加え、また方言以外にも若干の解説を加える。

(途中から引用)

Ech gesehen eigentlech nëmme Virdeeler fir hei am Kanton Cliärref ze waanen. Hei ass eng vill besser Liewensqualität, d' Lékt sē mi frëndlich a wat mer ganz wichtig ass, datt ass d' Veräinsliewen! Ech han no menger 13. Commerce 2 Joer BTS an der Stadt dobäi gemaat. Dono haat ech di gruuss Chance fir direct eng Platz op der Spaarkeess ze kreien.

Mäi Berouf ass grad de richtige fir mech, well ech gäer déi ganzen Zékt mat Lékt schaffen, an de Kontakt mat der Clientèle mer ganz wichtig ass.

(中略)

Mer gefällt et ganz goud hei zu Hëpperdang, an wann et nëmme miglich ass, wëll ech o hei waane bleiwen, fir datt meng Kanner spéider o d'Chance han an su enger schinger Géigend an hauptsächlich an su engem schingen Duarref opzewaassen. Well Hëpperdang ass na engt Duarref, wu et engt richtigt Zesaamenhaale gött.

Eppes hätt ech ewwer na am Häerz: ee klengen Nodeel hei am Norden ass et, datt den Aptéiken-an Doktischdéinst hei am Kanton schlecht organiséiert ass. Well et ka jo ewwer net sënn, datt wann een de Weekend drop aagewisen ass fir bei een Dokter ze goen, dat een da bis op Ettelbréck oder Réiden faare muss.

以下の日本語訳において、地名は一般の地図に記される名称に直す。²⁰ また、[] 内は筆者による補足である。

訳)

私はそもそもここクレルヴォー地区に住むことには利点があると思います。ここは [他

よりも]生活の質がはるかに良く、人々も親切です。また、私にとって重要なのはクラブの活動です。

私は [リセ・テクニクの] 商業コース13年生²¹を修了後、2年間首都のBTS [高等技術者資格コース]に参加しました。その後すぐに貯蓄銀行に職を得るという大きな幸運に恵まれました。

私の職業は私にはぴったりです。というのは、私はいつも人に関わって仕事がしたいと考えており、顧客の人たちとの触れ合いが大切だからです。

(中略)

私はここフッパーダンジュがとても気に入っていて、可能でさえあれば、ここに住み続けたいとも思っています。それは、将来私の子ども達がかんなに美しい地域で、そして特にこんなに美しい村で育つという幸運に恵まれるためにです。また、フッパーダンジュはまだ本当の助け合いが残っている村だからです。

しかし、気がかりなこともあります。ここ北部地域の小さな欠点は、地区内の薬局と医院のサービス体制が悪いことです。週末に医者に診てもらいたい時には、エッテルブルックかレダンジュまで行かなければなりません。それはあってはならないことです。

方言形 (下線の語)

※前節で例示した語 (sënn, han, waanen, Lékt, Zékt, gruuss, Brouf, goud, miglich) については解説を省略する。

geseen (L gesinn, D sehen) 見る、思う

eigentlich²² (L eigentlech, D eigentlich) そもそも ※項目(3)に該当するその他の語 (frëndlich「親切的」、richtig「適切な」、wichtig「重要な」等)は以下省略する。

mi (L méi, D mehr) もっと

Platz (L Plaz, D Platz) 職場、職

kreien (L kréien, D kriegen) 得る

o (L och, D auch) ~もまた、

su (L sou, D so) そのような

sching (L schéin, D schön) 美しい

opwaassen (L opwuessen, D aufwachsen) 「育つ」の過去分詞

na (L nach, D noch) まだ

engt Duarref (L en Duerf, D ein Dorf) 一つの村 ※項目(8)および(10)

wu (L wou, D wo) ~な所 (関係副詞)

Zesaamenhaale(n) (L Zesammenhalen, D Zusammenhalten) 関係、助け合い ※項目(4)

ewwer (L awer/ower, D aber) しかし

Déinst (L Déngscht, D Dienst) サービス ※項目(7)

aagewisen (L ugewisen, D angewiesen) ~を必要とする (※動詞sënnとともに使われる)

faaren (L fueren, D fahren) 行く

その他の語注 (標準ルクセンブルク語)

nëmme ~だけ、hei ここ、no ~の後で（前置詞）、well/wëll ~なので（接続詞）、
eppes 少し、何か、BTS = Brevet de technician supérieur（高等技術資格コース）

この回答文の例から、前節で示した方言的特徴のほとんどが用いられていることがわかる。これは銀行に勤める若い女性を書いた文章であるが、次章で紹介するのも、若い女性教師の書いた文書である。

4. 小学校の連絡文書に見られるクレルヴォー方言

第2章で紹介したインフォーマントのC-4氏は、クレルヴォー市の西6~7キロに位置するヴィン克蘭ジュ（Wincrange）の小学校に勤めている。前述のように、この学校では児童の保護者に宛てた連絡文書や学校のホームページに掲載されるさまざまな行事等の報告文書でクレルヴォー方言を使用することが多いということである。ここでは、C-4氏から電子ファイルで送っていただいた、2012年6月に行われた遠足についての案内文書（配布された日付は不明）を引用する。ただし、二つ目の遠足の部分は省略する。また、日付の部分に引かれていた強調のための下線は取り外す。この文書はC-4氏を含む3人の教員の連名によるものである。前章と同様、方言形には下線を付す。

Léif Elteren,

Mir wollten Eech well fréi genou matdeelen, wieng Aktivitéite mir mat de Kanner ënnerhualen fir dëst Schouljoer aafzeschléissen.

Folgend 2 Ausflich së geplangt:

Mir fare Frégdes, den 29. Juni 2012 op de Burfelt bei de Stauséi. Do ass e „Waldentdeckungszentrum“, wou d’Kanner d’Planzen- an Déirewelt erforsche kannen. D’Kanner komme moies mam Bus an d’Schoul, da fare mir zesamen op de Burfelt. Moies guidéiert e Fierschter eis durich de Bësch a mëcht spillerisch Aktivitéite mat de Kanner. Mëttes grille mer do zesamen, d’Kanner brausche kengt Grillfleesch matzubringen. Nomëttes kommen d’Kanner wi ëmmer mam Schoulbus heem.

D’Kanner sollen „al“ Kleeder a Schung andon a sech dem Wiadder no kleeden. Si sollen e Bidon Wasser oder Jus an e klenge Picknick fir moies (an nomëttes) matbringen.

（以下、省略）

訳)

保護者のみなさま、

この学年度を終えるにあたり私たちが子どもたちとどんな活動を計画しているか、予め

みなさまに詳細をお伝えしたいと思います。

次の二つの遠足を計画しています。

私たちは2012年6月29日(金曜日)にダム湖近郊のブルフェルトへ行きます。そこには「森の発見センター」があり、子どもたちが植物や動物の世界を勉強することができます。子どもたちは朝バスで学校まで来て、それから一緒にブルフェルトへ行きます。午前中は森の管理人が森の中を案内してくれ、また子どもたちに遊戯活動もしてくれます。昼食はみんなでバーベキューをしますが、そのための肉を子どもたちに持たせる必要はありません。午後はいつもどおりにスクールバスで帰宅します。子どもたちには「古い」服を着させ、「古い」靴を履かせてください。また、天気に応じた服装をさせてください。午前(と午後)のための水かジュースを1本と簡単なお弁当を持たせてください。

北部方言形(下線の語) ※動詞は不定詞に、名詞や形容詞は基本形に直す。また、既出の語(faren, durich)に関しては解説を省略する。

genou (L genee, D genau) 詳しく

ënnerhualen (L ënnerhuelen, D unternehmen) 計画する ※項目(8)

aafschléissen (L ofschléissen, D abschließen) 終える、閉じる

Frégedes (L freides, D freitags) 金曜日に ※項目(5)

kannen (L kënnen, D können) ~することができる

zesamen (L zesummen, D zusammen) 一緒に ※項目(4)

spillerisch (L spilleresch, D spielerisch) 遊戯的な ※項目(3)

kengt Grillflesch (L käi Grillflesch, D kein Grillfleisch) バーベキュー用の肉(否定形) ※項目(10)

brauschen (L brauchen, D brauchen) 必要とする ※非標準形であるが、口語での発音の影響か。

wi (L wéi, D wie) ~のように

andon (L undone, D antun) 着る

Wiädder (L Wieder, D Wetter) 天気 ※項目(8)

Wasser (L Waasser, D Wasser) 水

その他の語注(標準ルクセンブルク語)

moies 朝、午前、no ~に応じて ※前置詞だが被修飾語(Wiädder)に後置されている、Bidon (Biddong) 瓶、缶、Picknick 弁当、

前章で見た雑誌記事の中のアンケート回答文と同様、ある品詞に偏ることなく多くの語において方言形が用いられていることがわかる。ヴィン克蘭ジュ小学校のホームページには、主として学校行事に関する報告が毎月何件かずつ掲載されているが、その多くはク

レルヴォー方言で書かれており、方言が使用される程度は、ここに引用した保護者への連絡文書と同じである。²³ 学校におけるこの種の連絡文書や報告に方言が使用されることが一般的かどうかは不明であるが、限定された範囲であるとはいえ公的な文書で方言が使用されることは非常に珍しい現象といえるであろう。

5. おわりに

本稿では、インタビュー調査で得られたクレルヴォー地区の方言話者の方言使用状況を紹介し、方言が文章語としても使用されている実例を示して、その特徴を分析した。その結果、方言的特徴の中でも、単なる母音の違いに基づく特徴だけでなく、標準語との相違が顕著な項目(5)(破裂音t/dの前における長母音または二重母音の軟口蓋音化)や項目(8)(標準語の下降型二重母音に対する上昇型二重母音の使用)のような特徴も使用されていることがわかった。ただし、ルクセンブルク語が読める人にとっては、こうした方言形でもまったく理解不可能というわけではなく、少なくとも文脈から意味を推し量ることができると思われる。

最後に文章語に方言が使用されることの意味について考察してみたい。まず、第3章で分析した雑誌に掲載された若者のアンケート回答文については、質問文が標準語で書かれているにもかかわらず、なぜ多くの人が方言で回答したのかという点が問題である。回答を求めるメールでの依頼文が方言で書かれていた可能性もあるが、そうでなくても、そもそも回答者の多くにとって日常生活でルクセンブルク語を書く機会というのはメール等の話し言葉に近い文体が用いられる領域であり、その場合方言を使用するのが一般的であるという可能性が考えられる。第4章で分析した学校の連絡文書においても、この文書の著者自身(インフォーマントのC-4氏)が、第2章で述べたように、方言で書く方が相手に親しみを感じてもらえると捉えている。

多言語社会であるルクセンブルクにおいては、フランス語やドイツ語で書かれる文書が公的な性格をもつ傾向が強いのにに対して、ルクセンブルク語は私的な領域の文章語として、特にメールやSMSなどの電子メディアにおいて、主として使用される。この点が、ルクセンブルク語が他言語の標準語とは異なる点であり、普段私的な領域で方言を中心に用いる人たちにとっては、コミュニケーション上の支障がない限りは、標準語よりも方言の方が地域アイデンティティを含む自分らしさを相手に示し、また相手との親密な関係を築くための手段として機能していると考えられる。

ルクセンブルク北部地域で見られる文章語での方言使用が他の地域にも見られるのかどうかは、今後の研究課題である。

注

* 本稿は、科学研究費補助金に基づく研究成果の一つである(基盤研究C、課題番号:25370472、課題名「ルクセンブルク語地域変種の文章語での使用に関する研究」、研究期間:平成25~27年度)。

また、本稿は2015年5月30日に行われた日本独文学会(武蔵大学)での研究発表「ルクセンブルク語北部方言の文章語での使用」の内容の一部を発展させたものである。

- 1 ルクセンブルクにおける言語に関する法的な規定については、田村 (2005) を参照。また、特に言語法制定時にルクセンブルクで繰り広げられた国民意識と言語の関わりをめぐる議論については小川 (2015) を参照。
- 2 ルクセンブルク語話者の地域変種に対する認知や意識に関する最近の研究として、Fehlen (2009) と Neises (2013) が挙げられる。これらの研究の概要については、田村 (2014) を参照。
- 3 Gilles (1999) の研究の概要については、田村 (2002) を参照。
- 4 Centre national de littérature, Grand Duché de Luxembourg が毎年刊行している *Bibliographie courante de la littérature luxembourgeoise* には、ルクセンブルクの文学・文化・言語関連の著書や論文・記事がリスト化されているが、2013年までの過去10年間の、著書として刊行されたルクセンブルク語による文学作品の数 (同一著書にいくつかの作品が含まれる場合もある、また翻訳作品は含まれない) を比較すると、以下のとおりである。2004年：36編、2005年：51編、2006年：33編、2007年：44編、2008年：45編、2009年：45編、2010年：27編、2011年：37編、2012年：39編、2013年：59編。ルクセンブルク語話者が30万人前後であることを考えると、この作品数の多さは驚嘆に値する。なお、このデータは次のサイト (<http://shop.literaturarchiv.lu/>) から検索し、ダウンロードすることができる。
- 5 田村 (2014) を参照。
- 6 カントン (Kanton) はルクセンブルクの行政単位で、国内に12のカントンが存在する。その下に各自自治体が所属する。クレルヴォー・カントンは国内の最北部を占める。地区の政庁舎は、クレルヴォー市にある。
- 7 インフォーマントは、ルクセンブルク大学のペーター・ギレス (Peter Gilles) 教授を介して知り合った人とその家族および知人たちである。インタビューは筆者に合わせてドイツ語で行われた。
- 8 リセ (lycée) はルクセンブルクの中等教育機関であり、小学校 (6年制) 修了後に入学する。リセには大学進学を目指すリセ・クラシック (7年制) と普通教育とともに職業教育も行うリセ・テクニク (専門分野により5~7年制) の二種類がある。同じ学校の中にこの二種類のコースが設置されている場合もある。
- 9 外国人保護者に話す場合の言語使用については、後述のヴィルツの女性インフォーマント (幼稚園教師) からまったく同様の情報が得られた。
- 10 „De Cliärrwer Kanton“ 2007/ Edition Spéciale の巻頭 (1-2頁) にある編集者 Léon Braconnier 氏の解説 (タイトルはなし) に基づく。
- 11 クレルヴォー地区の人口は1900年に15,527人であったが、1981年には9,880人に減少していた。その後、人口は徐々に回復し、2015年には16,822人に達している。ルクセンブルク統計局 (www.statistiques.public.lu) の資料を参照。
- 12 ドイツ語で回答した1名 (107-8頁に掲載) は分析対象に含めない。また、129-132頁に掲載された5人の回答は補遺として後から追加されたものようである。
- 13 パーセンテージは小数点以下を四捨五入する。
- 14 ルクセンブルク語の *œ* は中舌母音の [œ] を表す。文字と発音を始めルクセンブルク語の文法については、田原 (2013) を参照。
- 15 圧倒的多数が *hann* ではなく *han* と綴っている。ルクセンブルク語の正書法では、*han* の母音は長母音であるはずだが、標準語で *hunn* と書くべき語を *hun* と書いている人も多いため、じっさいに長母音を表しているのかどうかは不明である。同様のことは他の語に関しても言える。
- 16 C Zékt 「時間」に関しては、クレルヴォー地区の中でも最北部にしか見られない語形であり、この項目の他の方言形を使いながらも「時間」だけは標準形の *Zäit* を使う人が11人いる。
- 17 アイフェルの *n* 規則により *mäin* 「私の」の *-n* が脱落した。この現象については、田原 (2013 : 8-11) を参照。
- 18 該当する回答者は J. Haas 氏 (105頁)。
- 19 該当する回答者は以下のとおり : V. Arend / J. Baulsch / B. Valentin-Delaporte / R. Kremer / J. Ludwig / C. Schank / M. Schlechter / F. Thill。回答文は、129-132頁掲載の補遺を除き、回答者の姓のアルファベット順に掲載されている。
- 20 ルクセンブルクでは一つの地名が言語ごとに異なる形をもつことが多い。例えば、トロワヴィエルジュはフランス語 *Troisvierge* に基づくが、ドイツ語では *Ulfingen*、標準ルクセンブルク語では *Elwen*、現地方言では *Ëlwen* と呼ばれる。ただし、正式の地名が必ずしもフランス語に基づくとは限らない。

- 21 小学校から数えての学年を指す。したがって、リセ・テクニクの7学年目に当たる。
- 22 結果としてドイツ語と同じ綴りであるが、発音に関しては標準ルクセンブルク語から推測すると [ajjəntlic] のようになると思われる。
- 23 ヴィン克蘭ジュ小学校のホームページ (www.wincrange-schoul.lu) を参照。

参考文献

- Gilles, Peter (1999): *Dialektausgleich im Lëtzebuergeschen. Zur phonetisch-phonologischen Fokussierung einer Nationalsprache*. Tübingen (Niemeyer).
- Fehlen, Fernand (2009): *Une enquête sur un marché linguistique multilingue en profonde mutation. Luxemburgs Sprachenmarkt im Wandel*. Luxembourg (SESOPi Centre Intercommunautaire).
- Neises, Diane (2013): *Levelling toward a Higher Standard? A Study on Dialect Perception and Its Potential Implications for Language Change in Luxembourg*. MA Thesis submitted at the Department of Language and Linguistic Science, University of York, UK.
- Tamura, Kenichi (2011): The Wiltz Dialect in a Luxembourgish Drama for Children: Analysis of the Script for “Den Zauberer vun Oz” (2005).『愛知教育大学研究報告』第60輯人文・社会科学編、11-21頁 (愛知教育大学)
- 小川敦 (2015)『多言語社会ルクセンブルクの国民意識と言語』大阪大学出版会
- 田原憲和 (2013)『ルクセンブルク語入門』大学書林
- 田村建一(2002)「ルクセンブルク語諸方言の変容—Gilles(1999)の調査より—」『Sprachwissenschaft Kyoto』1、65-78頁 (京都ドイツ語学研究会)
- 田村建一 (2005)「第6章 ルクセンブルク」渋谷謙次郎編『欧州諸国の言語法』293-7頁、三元社
- 田村建一(2014)「ルクセンブルク語話者の方言意識と文章語での方言使用—ヴィルツ方言を中心に—」『ドイツ文学研究』46、29-42頁 (日本独文学会東海支部)

(2015年9月24日受理)